

生涯発達における転機の語りの役割について

杉 浦 健

(教職教育部専任講師)

はじめに

本論の基になるのは、大学生を対象にして「転機」を記述してもらった調査である¹。この調査自体は誰でも思いつくようなごく単純なものであった。調査を計画した際には、筆者自身が転機によって大きく変わったことを自覚していたこともあって、他の人はどんな転機を経験しているのか（そもそも転機を経験しているのか）ということ素朴に知りたいという気持ちを持っていた。だが、それを約1200人という多くの者に対して行い、得られた多様な記述データを眺め、分析することによって、この転機の調査が生涯発達心理学に対していくつかの重要な視点を提供していることに気がついた。

本論では、この調査で得られた転機の記述を後に述べるように「転機の語り」もしくは「転機の物語」としてとらえ、それが生涯発達心理学にどんな新しい見方を与えるのかを明らかにしていこうと思う。本論の目的は大きく2つある。ひとつは、「転機の語り」が私たちの生涯発達を形作っていく重要な概念であることを示すことだ。そしてもうひとつは、そのような「転機の語り」によって進む生涯発達がどのようなものであるのかを明らかにすることである。

いくつかのキーワードを前もって示しておきたいと思う。例えば「語り (narrative) もしくは物語 (story)」「ライフヒストリー (life history) もしくはライフストーリー (life story)」「フォークサイコロジー (folk psychology)」「社会的構築主義 (social constructionism)」「意味生成 (significance)」などだ。近年の社会科学の流れを作っているこれらのキーワードが示すように、本論で明らかにされる生涯発達のあり方はこれまでの実証主義的な発達心理学を越える（もしくは逸脱する）ものになるだろう。だが、それは生涯発達を問題にするようになった発達心理学の必然的な形なのである。これまでの心理学のあり方では生涯発達は捉えきれないのだ。本論はその意味でこれまでの心理学へのささやかな批判にもなるだろうと思われる。

生涯発達心理学の困難

これまで発達心理学は乳幼児から青年までを主にその研究対象にしてきた。そのような研究対象の限定は、それまでの発達心理学の持っていた発達観に由来する。その発達観とは、「生物学的プログラムによって規定された、方向性を持ち、継時的に起こる組織的变化として個体の心理学的発達をとらえようとするもの(小島、1995)」である。この発達観が意味するのは、決められた道筋に従って起こる右上がりの能力増大としての発達である。この発達観は生物学的発達の影響を強く受けたもので、発達心理学が実証的研究を行うにあたって都合の良いものであった。いや、むしろ発達心理学が実証的研究をその研究パラダイムに採用していたからこそ、そのような発達観を持ったと言えるだろう。

ところが、次第にそのような発達観をもって研究をおこなうことの限界が露呈されることになる。特に生涯発達に関心のある人たちは、このような発達観では生涯発達のなんたるかがほとんど示せないことをはっきりと認識していた(Gergen, 1994; 田中, 1996; やまだ, 1995)。そしてこの発達観を乗り越えようとしているのだ。

発達心理学は、字義通りにとらえれば人間の心理的側面が発達していくことを研究する学であると言える。だが、いったい誰が私たちの心理的な発達が成人になるまでで終わり、それ以降は全く発達しないなどと考えるだろうか。確かに乳幼児期から児童期にかけては、脳や身体などの生物学的発達によって心理的な発達が大きく左右されるだろうし、またその時期の心理的な発達もめざましいものがある。そのような時期であったら、生物学的な発達に焦点を当てることによって、心理的発達の多くのことが説明できるだろう(もちろん乳幼児であっても生物学的な発達のみで心理的な発達をすべて説明できるわけではない)。だが、青年期から成人期以降、そして生物学的には衰退に向かう老年期にあたっては、生物学的な発達に焦点をあてた発達研究にほとんど得るものはないだろう³⁾。

ところで、これまでの発達心理学で生物学的な発達が強調されていたのは、それがすべての人間に普遍性のある要素と考えられてきたからだ。またそのような普遍的な要素であるからこそ、客観的に実証できると考えられていたからだ。ところが、生涯発達を問題にしようとする、とたんにそのような普遍性を前提においた考え方が困難になる。青年期以降の心理的発達は、生物学的な発達で説明できることはほとんどなく、その多様性のために、実証的な研究が行いにくくなるのだ。それでも青年期であれば、例えば「学校に通う」というほとんどの人に

共通な社会的・文化的要素があるために、多様性が緩和されて心理的発達の一般的傾向を見出すことができるかもしれない。だが成人期以降の発達まで考えると、その多様性は無視できないものとなるだろう。例えば生涯独身で生きる人と、子どもを生み育てる人とは、心理的発達のあり方や発達課題は大きく異なることだろう。例えば営業職の人にとって、対人能力はまさに発達させたい能力だろうし、実際仕事を長く続けることによってその能力は発達していくだろうが、小説家が仕事を続けてもそうはならないだろうし、そうなる必要もないだろう。また、小さいときから人見知り悩まされていた人にとっては、人と社会的につきあえるようになることは当人にとってまさに発達課題となるのだろうが、もともと社会的にふるまえていた人にとってそれは取るに足らない問題だろう。

生涯発達をとらえるためには、このようにその人が社会的におかれている状況や、出会ってきた人たちの影響、さらにはそれまでのあり方など、非常に多くのことを考えに入れなければならないのだ。その発達の道筋も必ずしも右上がりに向上するものではなく、本論が示す転機を通じた成長のように、停滞したり、ときには退行したり、またその時点では発達なのか退行なのかかわからないような変化に満ちているのだ。これはまさに人生そのものと言っても良いだろう。そのような本質的に個別性と多様性と複雑性をはらんだ人生という出来事をこれまでの発達心理学、つまり実証主義的な発達心理学はほとんどとらえることができなかったのだ³。つまり実質上これまでの心理学は、そのような多様性が相対的に少ない人生の前半しか問題にできず、人間の発達を問題にする学でありながら、人間の一生を問題にできなかったのである。そんなフラストレーションが生涯発達心理学を押し進める原動力となっていったのだ。

とらえられなかった変化

筆者自身、生涯発達に関心を持ちつつ、研究方法に困難を感じていた。正確にいうと、筆者の関心は生涯発達よりももっと限定的で、人が変わっていくプロセスを何とか示したいということだった。そのようなことを思い始めたのは、スポーツ選手が様々なきっかけを経て、失っていたやる気を取り戻すのを見たり、そのような話を本人から聞いたりしてからだ（杉浦、1996）。ところが、そのような変化がこれまでの実証的な方法論に基づく心理学ではうまくとらえられないのである。

確かに彼らの変化は、社会的・文化的な要因によってある程度の説明はできる。たとえば、クラブの雰囲気やそれまでのスポーツ経験など、彼らが変わることを可能にする条件を明らか

にしたり、変わることによって彼らの動機づけが実際に高いことなどを示したりすることはできるのだ。しかしながら、なぜほかならぬ彼が変わることができたのか、なぜまさにそのとき変わることができたのか、いったいどのようなプロセスを経て変わることができたのか、そのような変化に関するごくあたりまえの疑問を「実証的かつリアルに」示すことができないのだ²⁾。

筆者は実証主義的な心理学の訓練を受けて研究者になっていたし、実際問題として、論文を投稿する際には実証的研究でなければ、もっと現実的に言えば、数値化をして統計処理を行った研究でなければほとんど論文は採択されない状況であったから、なんとか実証的・客観的な研究を行いたいと思っていた。

しかし、筆者が何とか示したいと思っていた個人の変化のプロセスを実証的かつリアルにとらえる方法はなかなか見つからなかった。筆者が主に行っていた研究方法である評定質問紙は、ある人のある時点での状態を調べることはできるが、その人がなぜ、どのように変わっていったかのプロセスをとらえることはできない。ひとつ考えられた変化を示す方法は、過去の状態と現在の状態についてそれぞれ質問を行い、その差を見ることだったが、その方法では何がどう変わったのかをあらかじめ調査者側が決めて質問しなくてはならず、一人一人異なる変化のプロセスをとらえきれない。

個人の変化のプロセスをもっとリアルに感じられたのは、本人に直接報告してもらうことだった。具体的には本人から話を聞いたり、記述したりしてもらっている。だが、いかにリアリティが感じられるといっても、事例研究のような形ではその変化のプロセスに一般性・普遍性があるのかが特定できない。またインタビューで語られた内容が「事実」であるかどうかの検証も必要だと思われたが、それは非常に困難であった。筆者はどうしたら実証的な研究ができるかという観点から考えていたから、事例の一般性・普遍性や事実性を特定できなければ、変化のプロセスを記述の形で示すことにほとんど意味を認めることができなかつた³⁾。実証的に研究をしようと思えば変化のプロセスを示すことができず、変化のプロセスを示そうと思えばその研究の妥当性や価値を認めることができず、ジレンマ状態に陥っていたのだ。

転機のインパクト

転機の記述は、そのようなジレンマ状態に陥っていた筆者にとって、非常なインパクトがあった。大量(約1200人合計約20万文字)の転機の記述を読み、何とかそれをまとめようとする

中で、これまで感じてきた変化のプロセスに一般性があること、また転機による変化が青年期の発達を明らかにする手がかりになること、さらには生涯発達研究の糸口にもなることが感じられたのだ。その実感はこれこそ生涯発達の研究であるというものではなかったし、それらをまとめた結果を誰もが納得するようなものにできるのかもわからなかったのだが、転機の記述には確かに人が自分を成長させていくプロセスが多くの人に共通して感じられたし（後に述べるが、「成長していく」のではなく、「自分を成長させていく」である）、同時に個別性・多様性も失われず示されていたのだ。

理論的な後ろ盾もあった。それは転機の記述で示された変化が、ブルーナーの言うフォークサイコロジーを表している、ここでは人がどう成長すべきかについてのフォークサイコロジーを表していると考えられたことだ。

ブルーナー, J (Bruner, J., 1990) は、「フォークサイコロジーでは、人びとは信念という形で世界についての知識をもっていると仮定され、その世界についての知識を欲求や行動のあらゆるプログラムを実行するのに使用する」と述べ、心理学の研究において、人間の「行為」¹⁴を説明するためのフォークサイコロジーの重要性を説いている。

転機の記述で示された変化は、自分がどのように成長したのかについての信念であり、これからもそうあるべきだという価値観の反映である。マイナスに変わってしまったという者の記述もまた、本当はこうあるべきだけれど、そうではなくなってしまったという価値観を反映したものだ。そのような成長についての信念や価値観は、個人が独善的に心に抱いたものではなく、人が文化の中で生きていくことで身に付けてきた文化の価値観を反映したものだ。これはまさにブルーナー, J が言ったフォークサイコロジーである。

ブルーナー, J の考え方にしたがえば、人はこの成長のフォークサイコロジーを通して自らを成長させていく（成長を成し遂げるための行為を行う）と言える。そのような主観的な成長への信念は、個別性と多様性に富んだ生涯発達を考えるにあたって、非常に重要であり、調べることに十分な意味があると思われる。またフォークサイコロジーは本質的に物語形式なのであるが (Bruner, J., 1990)、物語形式は変化やライフサイクルあるいは発展過程の研究により適している (Bruner, E., 1986) と言われており、そのことも変化のプロセスをとらえたい私の関心を勇気づけるものであった。

ただし、本論で問題にする転機の記述は、これまでの発達心理学において心理的発達が起こりやすいとされてきた、いわばいまだ右上がりの成長・発達の時期である青年期の結果であって、成人期や老年期など、停滞や衰退などをも考慮に入れた上で発達のあり方を考える必要の

ある(やまだ, 1995)時期とは、その発達のある方が異なるのではないかという疑問もある。実際、転機の調査も本来は生涯発達を想定したものではなかった。だが、転機の記述で示される発達のあり方は、これまでの発達心理学が持っていた普遍的な右上がりの能力増大としての発達観とは異なり、生涯発達心理学が持つ個別性と多様性と複雑性をはらんだ発達観と軌を一にする。本論では転機による成長について主に論じているが、実際には転機の記述は必ずしも成長だけを示すのではなく、マイナスに変わってしまった者やアンビバレンツな変化を示す者(Aになったのはいいけれど、Bになってしまった、例えば「周りのことに気を配るようになったけど、神経質になって自分の殻に閉じこもるようになってしまった」など)もいる。成長の時期とされる青年期においても、成長は必ずしも直線的な右上がりではなく、各個人はそれぞれ複雑な道筋をたどって全体的な傾向として成長を示すのである。そのような発達のありようは(内容はそれぞれの時期に特有だろうが)、青年に限らずすべての時期における発達に共通するものであり、生涯発達の特徴だと考えられるのだ。

ここで転機による変化の特徴および転機のきっかけとなった出来事をカテゴリーに分けて類型化したものを示そう(表1、表2)。この調査では転機の時期について制限をしていないので、表1の変化の特徴はものごころついてから青年期になるまでの自己の変化ということになる。後でも述べるが、自分らしさの認識・主張のカテゴリー数が最も多く、エリクソンのアイデンティティ発達の概念がこれらの変化を表すのに適しているように思われるが、それだけではとてもすべての変化を説明しきれない。

どうしたらこのような多様な変化を説明することができるのだろうか。いや、生涯発達には本質的に個別性・多様性・複雑性が内在しているのだから、そもそも多様性をまとめて説明し尽くすようなことは不可能だろう。考え方の転換もしくは問いの転換が必要である。はたしてこのような多様性を内在した発達の現象を私たちはいかに研究することができるのだろうか。いかなる研究に意味があるのだろうか。以下では、今回得られた転機の特徴やそれらが生涯発達に果たす役割を明らかにしながら、このような困難な問いに対して少しでも的確な答えを探求していきたいと思う。

語りとしての転機

まずここで示した転機の記述が何を意味するのかについて問題にしたいと思う。ここでは各人の経験した転機とそれによる自己の変化を報告してもらっているが、このことはかつて自分

表1 転機による変化の特徴

変化の特徴	記述例	転機有り群	転機無し 変化有り群
自分らしき認識 主張	自分の考えている問題について互いに意見し合うことで自分の主張にも自信が持ったし、何よりも“自分の人生だから自分の生き方をしたい”とはっきり自覚するようになった。	205	52
視野拡大・人間 大きく・自己と世界 の客観視	授業を経て、自分の価値感の体系を客観的に見ることが出来るようになり、自分以外の思考方法に対しても理解出来るようになった。	161	39
他者受容・人にやさしく・非わがまま	人の意見をしっかり聞き、人の優しさ、人の良い面を有り難く思うようになり、自分自身も他人に優しく接する様になれた。	160	63
精神的強さ・できる 自信	いろいろな悩み・不安をへて頼れるのは自分しかないというわがまま、自分に自信が持てるようになり、また精神的にも強くなった。	122	19
積極的行動	それまでは何となくグダグダ物事に対して取り組んだり、安全に物事を考えていたがこれ以後は自分から積極的に何かに取り組むことの素晴らしさを感じ取って、積極性をえたとする。	109	26
精神的余裕	変わったあとはその時々で生きていけば良いと思えるし、「なるようになるさ」と思うようになった。柔軟になったと思う。	109	26
人見知り解消・友達 増える	とても恥ずかしがりやで人前で話すのが苦手でした。人見知りもしたし、幼稚園でも小さな声しかだせなかった。でもその子が転入してきて仲良くなっていくうちに、みんなの中へも入れるようになったし、一緒に演劇をやりに人前で大きな声を出せるようになった。	93	33
マイナス変化	今でも自信がない。積極的に行動できなくなった。まわりが気になってあまり外出しなくなった。人のことが信用できなくなった。	82	27
自己と世界探求	自分のことを意識して考えるようになった。自分はどうしたいのか、自分はどうすべきなのか、自分だというか、という風に。	81	5
物事の再認識（分かる）	高校に入学して今までの学校というものの在り方を考え直した。今までは勉強をする場所という認識でしかなかったが生き方を学ぶ場所と思いついた。	70	10
自己受容・肯定	自分で自分を嫌っていたのに、そんな自分が好きだと言ってくれる人に出会って、自分を認められるようになった。	69	19
目標・理想・興味の 自覚	変わった後→私にとってヴォーカリストは、現実の夢になった。今ならばはずかしいと思わずにヴォーカリストになりたいと答えることができる。	68	5
プラス思考	辛いことや悲しいことがあっても、楽しいことや嬉しいことがあるから、こういう気持ちを感じる事が出来るって思えるようになったりプラスプラスで考えられるようになった。	50	12
自立・責任	一人暮らしを始めて責任感もでて自立心がでてきた。	45	6
今の充実	興味のあることは、どんどん自分なりに自分のペースで頑張ってチャレンジしていこうと思うようになったので、毎日が楽しく充実している。	40	4
今の自分がある	今の自分があるのはこのような変化のおかげであり、私の今の性格の一部になっている。	34	0
今の重要性	経験の中で一度きりの人生を、悔いなく、気持ちよくめぐり合う他人を大切にしていこうと強く思った。そのために「今できること」「今しなければならぬこと」をそのつど考え、ベストをつくすことが一番だと信じて行動している。	30	5
人のありがたみ	その時から自分は一人だけ一人ではなく、何人もの人（親であり友達であり先生）に支えられて生きているとガツンと頭を打たれたような感じでした。	24	4
明るく	その時は学校へ行っても誰とも口を開かず3ヶ月ほど、一人で孤立していた。立ち直った後は見違えるほど明るくなり、まわりの友人から急に変わったことでたくさん声を掛けられるようになった。	24	5
自己の基盤・ささえ を得る	今の生き方の基盤になっている。自分を見つめるときのセオリーを身につけた感じ。	22	2
人への信頼	私と同じ考え方などをして、と同じような種類の人間がいることで、すごく嬉しくて、友達を信頼することを知った。	13	4
努力の大切さ	今までつらいことをしても別にしんどいだけだと思っていたのが、すごいつらいことでも一生懸命打ち込むことはすばらしいと思うようになった。	12	0
達観	自分にはどうやっても出来ないことがあるのだから、自分の出来る範囲で頑張ろう、と思うようになった。	11	2
その他	自分がかゆいとき、痛いときぐらいい泣かなかったが、人のやつでもらい泣きしたり、感動して泣くときがあるようになった。	64	20

注：一人の記述から複数の変化の特徴を抜き出して分類している。

(数字は記述数)

表2 転機になった出来事

人との出会い (師, 親友)	155
受験・浪人	106
人間関係もめごと (いじめ含む)	83
環境変化 (入学・進学・転校等)	69
話し合い・自己開示	63
死・病気 (自分および肉親, 友人等)	62
生徒会・クラブ活動	55
恋愛・失恋	53
海外経験	38
本・歌	36
心の悩み	30
一人暮らし	29
学び (授業)	29
打ち込めるものの発見	26
決断・断念 (退学, 退部等)	22
自然に	16
アルバイト	15
阪神大震災	13
怒られた	7
やせた	7
学校行事	6
その他	47

(人)

に起こった転機の出来事を正確にありのまま報告してもらっているわけではない。転機を境に自分が変わったといっても、必ずしも転機のまさにその時、劇的に変わったわけではないのだ。例えば受験に落ちて変わったといっても、合格発表の掲示板の前でにわかに変ったというわけではない。ここで報告された転機は、現在の時点において (ここではこの質問を受けた時点において) あれが実は自分の転機だったという「今の時点での気づきの報告」に近いのだ。この報告は、過去の転機の起こった現場に出かけていっての「実況中継」ではなく、転機とされたきっかけからいくつかのプロセスを経て今に至ったという一連の出来事を今ここで再構成して語る「転機の物語の生成」なのである。

近年「語り」や「物語」という概念が人間の認識や表現の特徴として注目されるようになってきている。私たちが何か認識したこと、経験したことを記述したり語ろうとしたりするとき、その論述形式が不可避に物語の形式を取るというのだ (Sarbin, 1986)。現象をありのまま客観的に記述をしていると思われている科学ですら、その記述は物語の形式を持つと言われている (野家, 1992)。ここでは「物語」の定義を、井上 (1996) に従って「物語とは現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序及び因果関係に従って一定のまとまりをもって叙述したも

の」としておこう。要するに、私たちは出来事や物事をばらばらにはとらえられず、時間の流れや因果関係のまとまりにして、物語の形式で表現するということだ。

今回、大学生達にしてもらった転機の記述は、これまでの経験において自分が変わった時間的なプロセスと理由（因果関係）を統一的に説明しようとする試みであって、まさに自己の転機の物語であり、自己の変化の物語である。その試みにおいて転機があると答えるか無いと答えるかは、語った時点で自分の転機の物語を作れるか作れないかなのだと言える。また転機があると答えた人の中でも、転機の経験がぱっと浮かび、この調査に打てば響くように転機の物語を報告できた人もいれば、今回のような調査によってはじめて、そういえばあれが自分の転機だったと気づいた人、つまり初めて転機の物語を作った人もいると考えられる。もちろん前者であっても、いつでも転機の経験を頭におき、自分が変わったことを常に認識して生活しているわけではなく、今回の調査で自分が変わってきたことを再認識するというのが本当のところだろう。いずれにせよこの転機の調査というのは、転機によってどのように変わったのかを客観的に調べるものではなく、質問によって促された転機の物語がいかなるものであるのかを調べていることになる。実はこれは今回の調査に限ったことではなく、インタビューなどの調査で過去のことを思い出して語ってもらう場合、語り手である調査対象者は過去をありのまま思い出して語るのではなく、聞き手である調査者との関係も含めて必ず現在自分が置かれている立場に応じて過去を再構成して語りを生成するのだ。

ところで、出来事や物事をばらばらにとらえられないのは表現を受け取る側も同様だ。物語化して表現することによって表現する側（語り手）と表現を受け取る側（聞き手）に共通の理解が成立するのだ。このことは発達研究のあり方にまで関わってくる問題である。筆者が転機の記述が生涯発達の研究の糸口になることを感じたのは、単にそこに発達の特徴が表れていたからだけでなく、それが物語の形式を取っていて、そこに発達のプロセスが示されていたからだ。もし発達の理論から物語の形式を完全に剥奪してしまったとしたら、私たちはその理論を通して発達を理解することができないだろう。例えば、表1は転機の記述で示された変化の特徴を分類したものである。ここでは青年期の発達の多様性を理解してもらうために提示しているのだが、ここからだけでは青年期の発達の多様性を見ることはできても、発達のプロセスを理解することはできないだろう。もちろんどのような特徴が変わるのかは発達理論の関心事のひとつだが、発達理論にとってより重要なのは、どのようなプロセスを経てそのような変化が得られるのかを明らかにすることだ。本論では、転機の物語を通して人がどのように変わっていくのかを明らかにしようとしているが、それは発達のプロセスには物語が密接に関わってい

るからだ。というより、発達のプロセスは物語という形式でしかとらえられないからである。このことは発達のプロセスは現在進行形では明らかにできず、本質的に後付けでしか明らかにできないことを意味している。後付けでしか発達のプロセスを明らかにできない理由は、後に述べるように、発達のプロセスには主観的な成長の認識が大きく関わっているからだ。

転機のお話の不安定性・不確定性

転機のお話は基本的に不安定・不確定なものである。私たちは過去を報告する際、起こった出来事すべてを正確に報告することは（そもそも認識することも）できず、お話の筋を一貫させるように出来事を取捨選択して、いわば「編集」する。そしてそのようなお話を編集作業は、現在の自己の状態に影響を受ける。例えば「打ち込めるものに出会うことができた」という転機を報告できるのは、打ち込めたということを経験しているからであって、現在の自己の状態が明らかに反映されている。だから現在の自己のあり方が変われば、転機のあり方も変わる。例えば半年後や5年後に語ったとしたら、今回語った転機は相対的に重要でなくなり、全く違う転機が語られるかもしれない。もっと極端なことを言えば、現在の気分によりによって、転機の内容が変わってしまうこともありうるだろう。また転機のお話は、聞き手との関係によりによって変わってくる。今回のような調査で語るのと、例えば友達や恋人に語るのでは別の転機が語られるかもしれない。また同じ人でも、あまり親しくなかったときと親密になったときでは、語られる転機は変わってくるかもしれない。本質的には今回の調査で語られた転機のお話は、いやすべての転機のお話はまさに「いまここで」語られた一回限りのお話なのである。

これまでの心理学では、ここで述べたお話を性質のような不安定性・不確定性は、調査・研究の価値を失わせる、避けるべきことと考えられてきた。なぜならこれまでの心理学は説明や予測や制御を目的としていたからで、説明や予測や制御のためには、安定した性質を持った説明概念が必要だと思われてきたからだ。例えば、社会的適応感を自尊心によって説明したり、予測したりしようと思ったとしよう。もしある人の報告した自尊心が翌日には全く変わってしまうようなものであったとしたら、自尊心は説明概念として調べる価値は無くなってしまおう。説明や予測や制御のためには説明概念はある程度安定している必要があると思われてきたのだ。

しかしながら心理学の研究においては避けるべきものだと考えられてきた不安定性・不確

性は、研究の価値を全く失わせるものではなく、時には積極的な意味を持つ。これまでの心理学は安定性を求めるあまり、変化のダイナミクスを無視してきたのだ。そしてそのような心理学のあり方は、本質的に変化に富んだ発達のリアルなあり方を隠すことによって、人間の生に対する予期せぬ抑圧を生み出してきたのである。このことは後に詳しく示したいと思う。

転機の機能 非連続性の認識

ここでは転機の物語の持つ役割・機能について問題にしていこう。今回の調査においても、転機の記述は当然上記のような不安定性・不確定性を持っている。だから転機の記述をそのまま信じて、彼らが客観的に変わったということは言えない。もしかしたら「口だけ」であり、他人から見たら何も変わっていないということも十分ありうる。これから述べることはそのような不確定な条件つきなのだが、そうであっても転機の機能について、いくつか言えることがある。そのひとつは、転機の物語の生成が変わらない自分・変わりたい自分を変え、自分の成長を見ることを可能にするということだ。その特徴は、自分が変えたいと思っている点が変わることだ。これは後述の発達の多様性につながる。

1. 高校2年のとき、友達に会って、すごい自分の考えに筋が通ってて、自分はこういうふうに思っているってはっきり言える人
2. 出会う前は相手に嫌われるのが怖くて人に流されて知らず知らずのうちに自分を殺してたかもしれない。出会った後は自分の考えを持てるようになってはっきりこうだ！と言えるようになった。考えに筋が通ったと思う
3. 自分は自分と言う風に考えられるようになった。自分の意見がはっきり見えてきて相手に主張できるようになり、そうすることによって相手の考えも聞けて見方が広がったし考え方も広がった。
4. 今以上にそれまでの（出会うまでの）自分に満足してなくて、どっかで変わりたいと望んでいたからだと思う。だからその子と話していたときうらやましいと思った⁷⁾

ただし、変えたいと思う点が変わるにしても、どう変わるのかは必ずしもすべて自由になるわけではない。また変えたいと思う点すべてが変わるわけでもない。時には、自分の思う通りにいかないことに何とか折り合いをつけて意味を見出していくこともあるのだ。

1. 2年前までの浪人時代の経験。
2. 考え方が変わった。自分に制限をもてるようになった。どうやっても不可能なことがあると判断し割り切れるようになったし、どの程度までならやれるかというのも何となくわかってきた。自分の悪いところ(欠点など)にもうやむやにせずに対応できるようになった。
3. 生活していくにあたって、力まずに冷静にたのしくすごせるようになった。
4. 悲しいこと、つらいこと、苦しいこと、これはと思ったことなどを予備校という特殊な環境で十分に経験したから。それぞれ背景に特別な意識や過去がある人々にたくさん出会えたから。

転機によって肯定的に変わったと言っても、転機という言葉には一般的に肯定的な意味があり、転機によって肯定的に変わったという報告がなされることは当然のことと言えるかもしれない。だが、そんな当たり前のことが実は人の成長に大きな意味を持つのだ。今回の調査で、多くの人が「転機を教えてください」という問いに対して「転機があった」という報告をしたということは、肯定的に変わったにせよ、否定的に変わったにせよ、人が自分の変化に対して非連続性の認識を持つことを表している。もしくは促されたら非連続性の認識を持つことが可能であると言ってもいいだろう。ここでの非連続性の認識とは、ある時、あることを境に質的に変わったと認識することができるという意味だ。人は転機の物語を語ることで、自分の変化についてこのような非連続性の認識を持つことができ、それによって自分が変わったことに気づき、変わったことに気づくことによって現在の自己をより肯定的に捉えることが可能になるのだ。これが転機の二つ目の機能である。

1. 大学に入った後、目標を見失い、大変悩んだ。目標のことにとらわれず、考え方から生き方に至るまで悩み悩んだ。
2. 考え、悩むことによって多くの人と知り合い、多くの考え方・意見を聞くことができ、もう後ろ向きに生きず前向きに生きようと思うようになった。そう考えると、自分のしたいこと・やるべきことも多く見つけることができるようになった。そうしていると、後悔せずに生きていこうと思えるようになってきた。
3. 以前は見えなかったものや考えることができなかったことでも今なら見つけられ、考えることができるようになった。視野が広がったと思われる。
4. 2. で書いたように、後ろ向きから前向きに生きると決めることができたからだと思う。何か変化を起こすためには何か大きな契機を経て、思い切った決断ができなければいけないと思う。

後ろ向きだった自分が変わって前向きになったと考えることで、今の自分の前向きさをより明確に認識することができるということだ。もちろんこれは逆もまたしかりで、非連続性の認識は自分をより否定的に見ることも可能にする。肯定的な変化が成長の物語であるということに對比して言えば、転落の物語を作ることも可能ということだ。

ところで矢野（1996）は教育学的観点から、出会いや危機、覚醒や回心など、人間の非連続的形式を形成する事象について、ベイトソンの学習理論を援用してコミュニケーション的に明らかにしようとしている。彼は、ボルノーの覚醒の概念が、ベイトソンが学習Ⅲと呼んだ自己システムの組換えであり、ソクラテス的対話のパラドクスによる論理階型の歪みによって新たな解釈図式が生まれるところにあることを明らかにしている。そして、このような覚醒を経験した者は、「反省作用によってこれまでの自己自身に対して優越したものとなり、またかつての自己への共感を忘れることはないトランス・コンテクスチュアルな人間になる」と述べる。転機の物語による非連続性の認識も、一種の覚醒と考えられるのであるが、それは単に自分のことを肯定的に見られるようになったというだけでなく、自己と世界との関係を一段高みから余裕をもって眺められるようになったことを意味するのだろう。そう考えると、転機の物語による発達とは、それまでの自己システムを新たに包み込んだ自己と世界との解釈図式への跳躍といえるだろう³⁾。変化の特徴において「視野が拡大した、人間が大きくなった、自己と世界を客観視できるようになった」などの変化の特徴が多かったのは、そのことを表していると思われる。

1. 高校3年生の時の大学受験に失敗した時。
2. 世界の中心だったのが、世界の一員になった。
3. そのような変化は、僕に違った角度から、あらゆる角度からの世界感を与えてくれ、今まで見えなかったようなことがたくさん見れるようになった。人の心のイタミや怒りや喜び。僕が幼稚なために、人に迷惑をかけ人をキズつけることもあるが、それも昔よりは少なくなったと思う。
4. 高校生の頃は、前しか見ていなかった。その横で起こっていることにはあまり気付かずに過ごしていた。でも、予備校や、大学に入り、とてもたくさんの人々と出会った。その中には、今まで出会ったこともないような人や、驚くほど変わった人、不思議な人に出会った。人にはまったく異なった世界観をみんな持っていることがわかった。それは、角度を変えるだけで夢のようにたくさんあるのだ。
たくさんの人に出会ったこと、これがもっとも大きな理由だと思う。

転機の物語の生成によって成長を認識できるといっても、転機を経験しなくても（転機の物語を生成しなくとも）自己の成長は認識されるようだ。今回の調査では、転機は無かったけれど、自分が変わってきたと報告した者（表1の転機無し変化有り群）も多くおり、その変化の特徴も転機による変化の特徴と同様である。そう考えると転機の物語を生成することは、成長の認識の絶対条件ではないものの、成長をより容易に捉えるために使われる自己認識の方法と言えらる。逆に言えば、転機の物語を生成できないことによって、成長したと認識できない者がいるということだ。例えば今回の調査では、転機も変化も無かった者には、これまでに自分の変化していない点を聞いているのだが、そこでは「積極的に行動できない」「自己主張できない」「意志が弱く努力できない」「人見知り」など、転機による変化前の特徴をよく表している記述がしばしば見られたのである。だが、はたして彼らのそのような特徴は、彼らの変わらない「性格」なのだろうか。確かに彼らは、そのような悩みを持っていない人よりはそのような特徴の強い人であろうとは思われるが、それが変わらない性格特性であるとは思えない。筆者が思うのは、彼らがまだ「転機の前」なのであろうということだ。

ところで転機による変化は、転機という言葉があるから可能になるともいえる。転機という言葉があることによって、私たちは人に自分の変化を伝えることができる。そして聞き手も転機の物語を聞いて、その変化に納得する。それは同時に自分の中での納得にもつながる。私が転機の研究をしているというと、多くの人が面白そうですねと言ってくれる。そしてそういえば私も、と語りだす人もいる。転機という言葉によって私たちの間に自己の変容、自己の成長に対する共通理解が成り立っているのだ。そしてその共通理解こそが、私たち自身の成長を認識させ、それが他者に認められるような成長へとつながるのだ（これは次節のテーマである）。

主観的成長の役割

ここまで転機の物語によって人が変わるということを述べてきたが、この変化の特徴はあくまで彼ら自身の考える主観的な成長であって、彼らに他人が認めるほどの成長が本当に起こったのかどうかについてはなんの保証もない。しかしながら、彼らが成長したと主観的に思うことで、実際に（客観的に、行動に現れる形で）そのような成長が彼らに起こる可能性が高くなると考えられる。なぜなら彼らは成長の物語を生成することによって、その自分で作った成長の物語の筋に従って行動をするようになるからだ。例えば、転機によって積極的になったと考えている人は、その主観的な認識を通して実際に積極的に行動することになるだろう。そう考

えると、ある人が成長したように見えるのは、転機の物語・成長の物語に従って行動パターンが変わり、成長した行動パターンが観察されるからと考えることができる。つまり、人は自分の作る転機の物語・成長の物語にしたがって自らを成長させていくのだ。主観的な変化が客観的な変化をもたらすと言ってもいいだろう。

もちろん、主観的变化イコール客観的变化ではない。「自分の変化を心では分かっているのだけれど、行動が伴わない」者もいる。今回の調査ではおそらく様々なレベルの転機があると思われる。それこそ自己のこれまでのあり方が全く変わってしまうような大転換もあれば、いくつもある自分の性質の一つが変わっただけの転機もあると思われる。転機が大きな行動の変化をもたらすには、その転機の物語が行動基準や信念として本人にどれだけの説得力を与えているかが問題になってくるのだろう。転機の物語が語られることと行動が変化することは全く同じではないのだ。

転機はなぜ人を変える

主観的な変化が客観的な変化を導くと言ったが、変わろうとどんなに思ったとしても、単に思うだけでは変わらないだろうと思われる。思うだけで変わるのなら、私たちの生活には悩みや苦しみなどほとんど存在することはないだろう。実際には変わりたいと思っても変わることができずに悩んだり不適応に苦しんだりするわけで、そんな簡単には変わらない自分が変わるからこそ転機の意味があるのだ。ではなぜ転機の物語によって人は変わることができるのだろうか。それは転機の物語が自分の変わった理由を説明してくれるからであり（因果関係を説明するのは物語の特徴である）、それによって自分が変わったことを「納得すること」ができるからだ。納得をもたらすのが転機の物語であり、転機の「ドラマ」なのだ。

ここで転機の「ドラマ」と言い換えたのは、しばしば転機の記述が非常にドラマティックだからである。それは自分の納得をもたらすためとも言えるし、ドラマティックだからこそ納得して変われるとも言える。ではなぜ転機の物語はしばしばドラマティックなのだろうか。それは転機の物語を作るプロセスがドラマをもたらす特徴を持っているからだ。

私たちが変わりたいという気持ちを持ったとき、何らかの答えを求めて動機づけられた状態の中で生活し、様々な出来事に会うことになる。例えば、今回の調査で変わらない否定的な自己を報告した者²⁴や転機によってマイナスに変わってしまった者は、ちょうどこの状態にあると言ってもいいだろう。興味深いのは、転機がなく、これまで一貫して自己が変わらないと

答えた者が自己の特徴として「マイペース」や「楽観的」などをあげていたことで、彼らは自分を変えたいという気持ちを持たない（持つ必要がない）ために転機が認識されなかったのだろう。それはさておき、人は変わりたいと思うことで、「変わるための準備状態」に自らを置くことになる。ライフコース研究の立場から転機の研究を行っている大久保（1989）はこの準備状態を「新しい生活構造の構築への契機となるべき出来事を無意識に探し求めているレディネス状態」と表現をしている。そのような状態に置かれた人は、変わるためのきっかけを意識的にか無意識的にかつかみ取ることになる。そして時にそれは偶然と言えないような偶然を引き起こす。例えば最近ベストセラーになった乙武洋匡の『五体不満足』では、彼の「転機」が書かれている（乙武, 1998）。

ある夜、彼は「自分はいかに生きるのか？」について考える。寝付けない夜を過ごし、彼は「自分は障害を持った人間しか持っていないものをなし遂げていくためにこのような身体に生まれたのだ、障害を持った自分にしかできないことを見つけ、実践していくことが自分がどう生きて行くかという問に対する答えになるはずだ」ということに気づく。そしてまさにその翌日、彼が言う「神がかり的」な出会いによって、彼はバリアフリーのまちづくりの実践に携わることになる。彼は奇しくも書いている。

耳を疑った。「自分の障害を活かすような生き方をしていきたい」と考えるようになってから、まだ一夜しか明けていない。ほんの、7時間ほど前のことだ。それがいきなり「実践」という場を与えられた。この流れは、何なのだろう。恐ろしいほどの力が働いているとしか思えない。とくに宗教を信仰しているわけではないボクでも、神の存在を信じざるをえないほどだった（乙武, 1998）。

大江（1998）は「恢復する家族」において「ジャストミート」という言葉で転機における偶然を語る。彼は自身の青年期の危機と、障害を持って生まれた子どもの問題に悩み、もがいていた時期に、広島で原爆医療に携わる医師と出会い、大きな転機を迎える。

「僕は若いときレントゲン医学をおさめた不屈の人格が、たまたま広島に着任されていたことの不思議を思った。また自分の生でのおそらく最初・最大の危機に、広島へ出かけてそのような医学者のお話を聞くことができた不思議を思った。しかもその医学者の生き方の思想というものをしっかり受け止めるために準備の教育を、大学で僕はもう一人生涯の師から与えられていたのであった…

こうした大切な要素の瞬間が、いわば運命のように生の過程のうちにある。そのことをいま僕は、さ

らに経験を重ねて疑わなくなっている。それを僕は、何者か人間を越えた存在が、われわれ人間を通じて「ジャスト・ミートする」瞬間、というふうと考えてみることもある。」(大江、1998)

我々の認識を越えて偶然を形作る何かがあるのかどうか、それは本論の目的を大きく越えることなので、ここでは不問にしておこう。だが私たちの思考形式には、魔術や神の存在、ユングの言うシンクロニシティのような超常現象を認識しうる素地がある。それは物語での物事の認識、すなわち「物事に意味を付与し、因果関係を見る性質 (Sarbin, 1986)」だ。そんな私たちの認識が超常現象のような偶然を作り出し、そして転機の物語を作り出すのだ。私たちは多くの出来事の中から変化の準備状態に「ジャストミートする」出来事を選び出し、転機のドラマを作り出すのだ。だから変わるための準備状態によって、友人のありふれた言葉やふと聞こえてきた街角の歌などのほんの些細なことによって大きな転機が引き起こされるのだ。

1. 浪人時代、司馬遼太郎の「花神」の中の、村田蔵六のセリフで「学問をなぜするのか、自分の為でもないし、他人の為でもない、やりたいからするのだ」という様な所を読んだ時。
2. 前は、浪人までしなければいけない勉強についてと、浪人させてくれた親のために少しでも偏差値の高い大学に入ろうとしている自分に違和感を感じていたが、その箇所を読んだ時に、ハッと気分が晴れ、自分のしたいことはこれではないと思い、学歴について負い目を感じなくなり、自分のしていることに自信が持てるようになった。その後は本を読みまくっていた。
3. 自然と自分の興味ある事と同じ事をしている人と知り合いになっていき、中途半端な付き合いではなく、腹を割って話せる人ができ、自分の励みになる。

1. すごくささいなきっかけなんです、19の頃にある歌を聴いて自分の中に価値観が大きく変わったように思います。

・目を見ればわかるなんてちゃんと言わなきゃ分からないというやつと

・同じならば魅かれない 謎だらけで切ない

という歌詞をきっかけにしてです。

改めて書くとすごい恥ずかしいのですが…。(後略)

逆に言えば同じ出来事でも転機のドラマに発展する場合と、日常の出来事に埋もれてしまう場合があるということだ。例えば筆者自身、心理学の研究者としてやっていけると思ったき

かけの一つは、ある心理学研究法の本を読んだことだったが、それはかつて読んだ時には特に印象に残ることもないものだった。ところが留年して自分がこれから何を目的に心理学の研究をしていくのかと考えざるを得ない状況になったとき、たまたまその本を読み返したことが筆者の転機の物語を形作る一つの出来事になり、私を変える力を持ったのだ。本を読んだときの「そうだったのか」という気づきはまだ新鮮に覚えている（これもまさに今物語っているのだが）。変わりたいと思っているときに起こる偶然は私たちにドラマをもたらし、私たちを変える力を持つのだ。

転機の機能 転機の物語は生の意味を保証する

矢野（2000）は、自己変容のために自己の語り直しが重要な意味を持っていることを明らかにしつつ、また自己の語り直しの繰り返しが、これまで比類なき自己を意味した自己物語を懐疑に晒すことによって自己と自己の物語を乖離させてしまうこと、そしてそれが自己も世界もすべて幻想であるというニヒリズムを亢進させてしまうことを警告している。はてしない自己の物語のリニューアルが、物語のインフレ現象を引き起こし、物語ることによる意味生成の力を衰弱させてしまうのだ。そうになると、人はもはや物語ることによって自己の生の意味や世界の存在の意味を感じることができなくなってしまうのである。

それに対して、掛け値なしの転機（しばしばそれは危機として現れる）は、自己の物語のインフレを抑える働きをする。変わらなければどうしようもやっていけないとき、語らなければどうしようもないとき、そのような転機の語りこそが、真の自己の物語になりうるのだ。

私たちが危機に対して転機の物語を語ろうとするのは、転機の物語を語ることによって危機に対して意味を与えようとするためであり、意味を与えることによって危機を克服するためである。能智（2000）は、頭部外傷という体験がよりよい自分を生きるための転機として解釈された事例を紹介している。

その女がああしてくれなかったら（自分をひいてくれなかったら）、俺は同じ生活を続けて、たぶんもう死んでたろうな。毎週五千ドル分のコカインをやって、自分を殺すことになっていたと思うよ。

事故の前、僕の人生は酒のせいでかなりめっちゃくちゃになってました。あの自己が僕の人生のバランスをとってくれたようなものですよ。おかげでクスリと酒をやめる機会がもてましたからね。

彼らはそれまでの自己を破壊した頭部外傷という危機に対し、自己の生に対する意味を与えることによってその危機を乗り越えようとしている。危機に対して意味を与えることは、同時に彼らの生に対して意味を与えることにもなるのだ。

危機は、自己と世界との関係を破壊し、それまでの自己を失わせる出来事なのだが、同時に世界から遊離した自己物語を取り戻し、自己と世界との関係を再構築する、そして真の自己を感じることを取り戻す重要な契機ともなるのだ。自己を脅かすまさにそのことが自己の回復の力を持つのである。

ブルーナー、J. (1990) は、自発的に書かれた複数の自伝を調べ、それらが普遍的な物語の特徴を共有していること、さらにそこに決定的な危機として「ターニングポイント」が出現することを明らかにしている。この現象は2つのことを意味していると思われる。一つは、自己が語られるとき転機が使われるということであり、もう一つは、転機が自己物語を書かせ、自己の生の意味を生成するということである。もし自己がずっと安定した、変わらないものであったとしたら、そもそも自伝（自己物語）は書かれないだろう。なぜなら変わらなければ物語にならないのだから。転機が、自己が変わったという認識を与え、自己が変わったという認識が自己物語を書かせるのだ。そして変化の認識こそが自己の生の意味を生成するのである。変わらないルーティンな毎日が、たとえそれが幸せな毎日であっても、ときに私たちに生きている意味を感じなくさせるのは、そして破滅の道であっても私たちがときに変化を求めるのは、変化こそが自己の生の意味を生成するためなのだろう。

不安定な転機の物語による安定

今回語られた転機の物語の中には、自分の今のあり方をまさに説明する比較的安定した物語もあれば、転機を教えてといわれてとっさに思いついたような不安定な物語もあると思われる。ここでの「安定した物語」の「安定」は、ずっと変わらない物語という意味ではない。ここでの安定の意味は、その人が転機を語るときに繰り返し参照されることが多い出来事であるという意味だ。私たちは様々な記憶を繰り返し参照することによって、ちょうど回りつづけるこまのように、もしくは走りつづけることによって倒れずにすむ自転車のように自己の安定を保っているのだ。

プラース (Plath, 1980) は、17歳のとき小豆島で特攻隊員として「自己の全存在を純粋な

形で発露させる」経験をし、現在は「その日その日をなんとか切り抜けていこうとあがいている平凡な人間」である不動産業を営む45歳の正司にとって、小豆島での経験とそれを象徴する軍歌とが、彼に「真の自分」を再確認させる記憶となっていると言う。

正司が自分の持つ全能力を動員して指導性を発揮したり、純粋な行為に身をささげたりする、そういう契機が彼の現在の状況の中にあるとは思えないが、軍歌は依然として彼にとって一種の浄化力を持っている。それはいわば個人的な賛美歌である。(中略) この賛美歌のおかげで正司は、自分が普通の不動産屋よりも正直な人間であること、そして損得の計算という商売上の必要に汚されていない純粋な心を胸の奥底に秘めていることを再確認し、元気を取り戻すことができる。

転機の物語による成長や転機の物語を語ることで感じられる生の意味は、決して失われない不可逆的な性質のものではない。また、私たちの人生に永遠の安定をもたらしてくれるものでもない。能智(2000)の報告した頭部外傷者の前途も決して安楽なものではなく、これからも多くの困難と危機が待っているはずだ。それは頭部外傷者だからというわけではなく、転機の物語が不安定・不確定である以上、私たちだれもが同じ立場なのだ。だが、これからの安定を保証するものではないからといって、語られた転機の物語や自己の成長は決して価値を失うものではない。それは私たちの人生を形作ってきた成長の「記憶」として、これからの人生に安定を与える手助けをするのだ。例えば、下記のような地震による「日々のかげがえなさ」の認識も、日々の忙しさにまぎれ、忘れがちになるかもしれない。ただ、それはまったく消え去ってしまうものではなく、再び思い出されることによって(語られることによって)成熟や発達を保つ物語となるのだ。かつて読んだ本を再び本棚から取り出して新たな感動を感じるように、そのような物語を記憶の書庫の中に取り出せるよう多く並べていくことが発達のひとつの意味と言えるだろう*。

1. 1995. 1. 17の阪神淡路大震災
2. それまでは明日は必ず来るものと信じて疑わなかったが、身近に人を失い、毎日を精一杯生きようと思った。あっけなくつぶれた日常生活の中で学校に行く価値はあるのかと真剣に思ったりもしたが、ボランティアに参加して、どんな免許でも特技でも持っていた方が役立つと思い、いろんなことに前向きに参加しようと思い始めた。
3. 今でも一日一日を大切にすごそうと思っている。

1. 1995年1月17日、兵庫県南部地震（阪神大震災）
2. それまではあまり感じなかった、日常的に当り前にあるもののありがたみをひしひしと感じた。水、電気、ガス、家、人のあたたかみ、等。人間と、人間が作り出したものの弱さを知った。それまでは、人間がこんなにちっぽけな存在だとは思もしなかった。
3. どんなささいな事でも、ありがたみを感じるようになった。不幸な事でさえも、視点を変えて、その中にあるわずかな幸せを感じようとするようになった。
4. どうしてか、という問いに答えるのは難しいが、日常生活を一瞬で奪われたら、人間、変わらない方がおかしいのではないか。

自己の安定は繰り返し物語を参照することで保たれる。安定した人はお気に入りのプラスの物語（たとえば自分が大きくプラスに変わったという転機の物語）を繰り返し取り出せる人である。ただ、そのような人がマイナスの物語を全く持たないわけではない。記憶の書庫の中にはプラスの物語だけではなく、マイナスの物語も含まれているだろうし、そのような本がふとした拍子に開かれてしまうこともきっとあるはずだ。どんなに安定した自己認識を持っている人でも、ちょっとしたことで落ち込んだり、自己嫌悪に陥ったりするだろう。そんな倒れそうになった自分を何とかプラスの物語でバランスをとっているのが、人間のあり方であり、ちょっとしたマイナスでは倒れないようなプラスの物語を参照できることが発達と言えるのだ。

このイメージは、エリクソン（Erikson, 1963）が漸成図式において心理社会的危機を肯定的項目と否定的項目との対概念で示し、危機的事態の解決を肯定的項目の否定的項目に対する割合的な優越で示したこと（例えば、乳児期においては「基本的不信に優る割合で基本的信頼を発達させることが、心理社会的順応における第一歩（Erikson, 1963）」だと言う）に類似していると思われる。

エリクソンは、心理社会的危機の解決を単純な肯定的項目の「達成」と考え、否定的項目を無頓着に省いてしまう見方に強く異議と警告を発している。

ある研究者は、熱心にこれら諸段階を引用して達成尺度を作成しようとする余り、生涯を通じて「肯定的」観念のきわめて動的な対応部分であり続ける「否定的」な観念（基本的不信、疑惑など）すべてを無頓着にも省いてしまっている。また、各段階で、善良であることが達成されると、それは新たな内面的葛藤や変動する外的諸条件に侵されることはないという仮説は、成功主義のイデオロギーを子ども

の発達の上に投射したものである、と私は信じている。その立身出世主義は、我々の私的な空想や社会一般の夢に非常に危険な状態で浸透し、新しい産業時代という歴史の中で意義のある生存をするための熾烈な戦いにおいて、われわれを不適格にすることがある。人格は生存という冒険に絶えず挑戦しているのであって、身体の代謝作用が衰えに対処している時でさえ、それを止めることはない。

このように人間の成熟や発達を考えると、私たちがこれまでもってきた完成した自己像・発達像の抑圧が浮かび上がってくる。それはネガティブの全く無い、完成され安定した自己像だ。それは決してとり着けない理想像である。人間にとって理想はあるほうがよいのだろうが、間違っただけ理想は多くの場合、害悪をもたらす。ネガティブの全く無い安定した自己像を求めることは、現在のネガティブを含んだ自分を決して認められない状態を引き起こしてしまうだろう。

このような安定した自己像の抑圧を引き起こしてしまうのは、私たちが人間の発達や自己像について実証的に明らかにしようとしていたからとも言える。筆者が転機の研究をはじめたとき、転機によって成長した人が、これからもずっとその成長を保つのか、適応的な状態にありつづけるのかの確証を求めていた。これからの状態を転機の経験がどれだけ「予測」するかが知りたかったのだ。これはまさに実証的な心理学の目的だ。しかし、そのような目的に対して転機の語りは不安定であり、とても実証的な心理学が目指すような予測などできないものだった。筆者は当初そのことが実証を妨げる悪しき現象であると考えていたが、それは自己のありかたをよりの確にとらえた現象であって、むしろ実証しようとして安定した自己を想定することが、変化する自己のありかたをリアルにとらえられない桎梏となっていたのである。

それに心理学の研究において避けるべきものと考えられてきた不安定さは、研究の価値を失わせるものではなく、変化のダイナミズムをとらえる積極的な意味を持つものである。それは説明・予測・制御といった実証主義的な心理学の目的からも決して外れるものではない。例えば、社会的適応感を説明したり予測したりしようとするのは、社会的適応感の低い人を傍観するためではなく、少しでも社会的適応感を高めて欲しいと考えるからだろう。だから例えば、ある転機によって低かった自尊心が高くなり、社会的に適応できるようになったという転機のお話は、たとえ自尊心がまた何らかのきっかけで低くなってしまふ可能性を残した不安定なものであったとしても、その時点における肯定的変化を表すものとして十分に意味があるのだ。

本質的に不安定な自己の成長物語は、発達課題を乗り越えてそれぞれの年齢段階での安定を手に入れるという、いわばプログラムされた生涯発達という考え方を大きく変えるものだ。不

安定な転機の物語によって進む生涯発達は、より多様性を持った、かつダイナミックに変化するものなのである。

成長の多様性へ

前述したように主観的な変化が客観的な変化をもたらすということを考慮に入れると、発達理論を構築するにあたって、人が自分や他者の成長をどのように捉えているかが非常に重要になってくる。転機による変化の特徴は、調査対象者が「自分はこのような側面が肯定的に変わった」ということを報告することによって、結果的に彼らがどのように成長するのかについてのフォークサイコロジー的な発達理論を示しているのだ。

これまでの発達理論の多くは、発達の变化を客観的な観察者（研究者）が記述することによって構築されてきた。典型的には乳幼児の発達理論である。乳幼児の発達はその多くを生物学的な発達に基づいているため、起こりうる変化を出来るだけ正確かつ客観的に観察することによって理論が構築されてきた。そこではあくまで客観的な発達が存在すると考えられ、発達主体が自らの発達を主観的に決定することなどという考え方はあるはずもなかった。それに対して、フォークサイコロジーとして構築される発達理論は、これまでの発達理論とは大きく趣を異にする。そこには発達主体が自らの発達課題を主観的に決定する自由が存在するのだ。そして、そのために各人の発達には無視できない多様性が見られるのだ。もちろん自らの発達を主観的に決定できるといっても、それは社会や文化から全く自由に決定できるということではない。人の変わりたいという意思が転機の始まりという意味で自由だということだ。

ところで青年期の発達というと、エリクソンのアイデンティティ形成がすぐに思い浮かぶ（Erikson, 1982）。そして今回の転機による変化の記述には、確かにこのアイデンティティ形成に関連するものが多い。例えば、記述数の多かった自分らしさの認識・主張や目標・理想・興味の自覚、積極的行動などは、アイデンティティの感覚や目標に対するコミットメントなどとの類似性が感じられる。また他者受容や視野拡大についても、自分らしさの認識によってそれらを得ることができたという記述がしばしば見られており、アイデンティティ形成に関連して起こる変化だという見方ができる。そういう意味では、転機の物語をもとに構築される発達理論にも、青年期における発達の一般性が見いだされていると言えるだろう。視点を変えて言うなら、今回の調査によって青年期におけるアイデンティティの発達の妥当性が示されたということだ。

ただし、このことは今回の調査における肯定的変化がすべてアイデンティティ形成によって説明できることを示しているわけではない。例えば、今回の調査においては、偶然に起こった出来事が転機となった例が見られる。その中の悲しい例として、すでにあげた阪神大震災を転機としていた13名が挙げられる。彼らが偶然起こった出来事に苦しみ、それを乗り越えることで得た肯定的変化（例えば、今の重要性の認識など）は、おそらくアイデンティティ形成という観点からは説明できないだろう。だが、そのことをもって、彼らの肯定的変化は、偶然による特殊な変化として発達理論から排除されるべきではないだろう。

また、もともと人見知り激しく友達づきあいがうまくいかなかったけれど、接客のバイトの経験から人見知りが解消され、友達も増え明るくなった、という例はどうだろう。人見知りがなくなり、明るくなったという変化は、彼女（女性が多かった）がもともと人見知りをしてきたという自己認識が無ければ起こらない変化だ。このように、ある人のそれまでのあり方に大きく左右されるような変化も、一般性のない特殊な変化として発達理論から排除すべきものだろうか。

もちろん、そうではないだろう。青年期の発達、そして青年期以降の生涯発達を考えると、一人一人が経験する出来事の違い、すなわち彼らが生きる人生の違いによって表れる多様な変化は、彼らの発達を理解するにあたって絶対に無視できないものだ。青年期以降の発達に見えてくる一般性は、乳幼児の発達のように共通する発達が一般性としてあるのではなく、一人一人の生きる人生に類似点があることによって、本来的には多様であるはずの変化に共通性が立ち現れてきたものなのだ。そして、そのような共通性こそ、文化心理学が問題にする「文化」なのであり、そのような共通性によって明らかにされる特徴こそが社会的に構築された発達理論と言えるのだ。

必然性に基づいた発達から偶然性に基づいた発達へ

これまでの発達理論は、生物学的な要因にしても、文化的な要因にしても、必然性に基づいた発達を明らかにしようとしてきた。しかしながら震災による転機の物語は、私たちの自己変容、発達、成熟が偶然に左右されていることを示している。言い古された言葉かもしれないが、私たちの人生を決める根本は運なのである。転機による発達理論は、これまでの発達理論とは異なり、生物学的・文化的必然性の制約を受けながらも、偶然性に大きく余地を残した発達理論になる。もちろん人生を決める根本が運だとしても、私たちは運命に身をゆだねているだけ

ではない。私たちは語ることによって積極的に起こりくる出来事に意味を与え、偶然の出来事を必然の出来事に変えていくのであり、そのプロセスこそが生涯発達なのである。そして、私たちは偶然の出来事に意味を与えていく生涯発達のプロセスを通して、画一的で必然的な人生ではなく、個別的で多様性に富んだ人生を生きることができるのだ。

まとめ 生涯発達心理学は如何にあるべきか？

本論では、転機の語りという観点から生涯発達を考えることで、これまでの発達観が変わらざるを得ないことを明らかにしてきた。生涯発達のプロセスは、同じ文化を生きるものとしてある程度の共通性と一般性を示しつつ、本質的には個別性・多様性・複雑性に富んだものだ。そのような生涯発達の特徴に対して、これまでの発達理論のように普遍的な発達課題を考え、個別性の文脈を無視することは時に私たちの生に対して抑圧をもたらす。ガーゲンとケイ (Gergen & Kays, 1992) は、人が生きている文脈の個別性を無視することで、セラピーがいかに抑圧的で、ときにこっけいなものになってしまうかを示しているが、それは生涯発達を考えるにあたっては全く同じことだと思われる。

夫をなくし三人の幼い子どもとアルツハイマー痴呆の義母を抱える女性に対して、自己実現を強調することが有益なこととは思えないし、ニューヨークのパークアヴェニューで開業する弁護士に、日々の感情表出を豊かにすることを勧めることは適切な援助とはいえない。

それでは、これからの生涯発達心理学はいかにあるべきだろうか。これまでのように普遍性を追い求めることはもはや不可能である。だからといって一般化・類型化の努力を放棄して、ひたすら個別事例を追い、生涯発達の個別性のみを明らかにすべきとも思われない。そもそもたとえ個別事例を追ったとしても、個別性のみを明らかにすることなど不可能である。なぜなら私たちが個別事例の個別性を理解するためには、そこに私たちとの共通性を見なくてはならないからだ。共通性が「地」にならなければ、「図」としての個別性は見えてこないのだ。能智 (2000) が言うように、「「特殊」は、真空の中に突然あらわれるのではなく、類型としての「一般」や「普通」からのずれという形ではじめて見えてくる」のである。ただ類型としての「一般」や「普通」は、絶対的な普遍性を表すものでももちろんない。それは多様な生涯発達の中の、比較的多くの人に共有された「ひとつの見方」であり、(発達を問題とする本論の文

脈で言えば) 発達についての「ドミナントストーリー (White & Epston, 1990)」なのだ。そして本論や生涯発達心理学がこれまでの発達観の問題を照らし出したように、その見方はたえず懐疑され、吟味されることが必要であり、ときには別の見方にとって代わられる必要があるのだ。生涯発達心理学の役割は、発達についての「ドミナントストーリー」を明らかに照らし出し、「オルタネーティブストーリー (White & Epston, 1990)」の可能性を探ることなのである。そしてそのためには本当に月並みだが、ドミナントストーリーを照らし出す類型化も、オルタネーティブストーリーを供給する個別性の理解も、どちらの試みも重要だろうと思われる。

能智 (2000) は、語りの「類型化を越えて」において、類型化と個別事例の理解とのあるべき関係について示している。彼は頭部外傷者の自己のとらえ直しを実際に類型化したものを例にして、質的研究における類型化の機能について、1. 新たな観点から現実を眺め、さらに別の法則性を発見する機能、2. 個別事例の理解の際に、彼ら (頭部外傷者) をこれまでとは異なった存在としてみる視点を提供する機能、3. 類型化からはみ出た特殊性をよりはっきり認識させ、事例の個別性を新たに発見するための契機となる機能を示している。

ここで重要なのは、類型化が真実を発見することになっていないことだ。類型化が新たな「法則」定立へ、そして個別性のより深い理解に向けて使われる「仮設」のものになっているのである。それはちょうど建物を建築するときに、後に取り壊される枠組みのようなものだ。生涯発達が変化に富んだものであるように、生涯発達の理論もたえず変化していくことを求められるのである。生涯発達の理論は、これまでの見方に対して新しい見方を提供し、さらに後の新しい見方のために供される、変化していくかりそめの枠組みなのだ。

ここにおいて私は、生涯発達心理学が、いや、のみならず心理学がこれまでの安定した普遍性を求める「安定の心理学」から、不安定・不確定で絶えず変化する現象に対して絶えず新たな見方を提供していく「変化の心理学」へと変わっていく必要性を感じている。本論もその試みの一プロセスと言えるだろう。本論が生涯発達心理学に対して新たな見方を提供していることを、さらにこれからの新たな見方を生成するための基礎となることを希望したいと思う。

脚注

- i この調査では、大学生に「自分が大きく変わった転機があったかどうか、また、転機はどんな出来事がきっかけで、それによってどのように変わったか」を聞き、それを記述してもらっている。この調査は溝上慎一 (現京都大学高等教育教授システム開発センター講師)

を代表とした「大学生の意識調査」の一部である。

- ii 矢野（1995）は、発達という言葉には増大・進歩・向上といった価値的意味と生物学的な発生という没価値的意味があると述べている。生涯発達心理学は、生涯を通して人間が発達すると考えているが、その際の発達という言葉には明らかに価値的意味が付与されている。本論でも同様のスタンスを取り、発達という言葉に成長・成熟・人間形成といった価値的意味を付与している。そのため例えば老年期の生理的な衰退を調べるような研究は発達研究には含まれない。生涯発達心理学は、老年期の生理的な衰退にもかかわらず、発達していく人間の心理を見いだそうとするのである。
- iii これに対して、人類学や社会学では、ライフヒストリーやライフストーリー、ライフコースといった個人の生を問題にする研究がおこなわれている。生涯発達心理学は、それら他分野における方法論や認識論的スタンスに大きく影響を受けていると思われる。
- iv ここでのリアルとは、あくまで筆者個人の感覚である。リアルさを感じられないということとは、こんなことを知りたいのではない、こんなことを言いたいのではないという感覚だ。
- v 現在では、転機の記述の妥当性も、事例研究の意味も見出すことができる。重要だったのは、転機の記述を事実の報告としてではなく、転機の物語としてとらえるという考え方の転換であった。記述の内容が正しいかどうか客観的に決定できない以上、その記述は信頼性・妥当性の無いものになってしまうが、転機の物語がどのようなものであるのか、記述がどのように書かれているのかについては、十分な客観性が保たれるのであり、それをもとに信頼性・妥当性の高い研究をすることが可能だからである。
- vi 「行動」ではなく「行為」である。ブルーナー（1990）は、人間を理解するためには、目に見える行動ではなく、志向性に基づいた行動、すなわち行為を問題にすることが必要であると述べている。行為とは、言い換えれば行動の意味だ。例えば、私の顔に手を当ててきた恋人の「行動」を観察するだけでは、その恋人の心を理解することはできない。その恋人を理解するためには、その行動にどんな意味があったのか、やさしく愛撫するためなのか、殴ろうとしたのか、ものを取ろうとしてあたってしまったのかなどを考えなければならないのだ。
- vii 転機の調査では、転機について4つのことを聞いている。1. いつの、どんな出来事だったか、2. 転機前後でどのように変わったか、3. そのような変化が現在の自分にどう影響しているか、4. どうして変わったかについての理由である。
- viii ただし今回の転機の記述がすべてこのような大きな自己変容であるわけではないと思われ

る。また、そのような大きな自己変容でなければ自己変容ではないと規定するつもりもない。そのような考え方は常に変化する人間の生のありようを見えなくしてしまう。今回の転機の記述から言えるのは、人は大きな転換や小さな変容を繰り返しつつ生きていくということなのである。

- ix 今回の調査では、転機が無いと報告した者には、これまで自分が変わったと思われる点があるかどうかを聞き、あると答えた者には、どのように変わったかを、無いと答えた者には、これまで一貫して変わらない点は何かを聞いている。
- x より精確なたとえをめざすならば、転機の物語の参照は、一人で本を読むのではなく、誰かに語って聞かせる行為だと言える。なぜなら転機の語りには聞き手が必要だからである。また語って聞かせる際にも、本を朗読するのではなく、ちょうど子どもに寝物語で物語を語るように、内容を思い出して語る行為なのである。それは転機の物語が過去の精確な報告ではなく、現在において再構成されたものだからだ。

引用文献

- Bruner, E. 1986 *Ethnography as narrative*. Turner, V. & Bruner, E. (Eds) *The anthropology of experience*. Chicago: University of Illinois Press.
- ブルーナー, J. 岡本夏木・中渡一美・吉村啓子訳 1999 *意味の復権* ミネルヴァ書房 (Bruner, J. 1990 *Acts of meaning*. Harvard University Press.)
- エリクソン, E.H. 仁科弥生訳 1977 *幼児期と社会 I* みすず書房 (Erikson, E. H. 1963 *Childhood and society* Second edition. W.W.Norton & Company.)
- エリクソン, E.H. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 *ライフサイクル、その完結* みすず書房 (Erikson, E.H. 1982 *The life cycle completed*. W.W.Norton & Company.)
- ガーゲン, K.J. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀監訳 1998 *もう一つの社会心理学* ナカニシヤ出版 (Gergen, K.J. 1994 *Toward Transformation in social knowledge*, 2nd edition London: Sage Publications.)
- ガーゲン, K.J.・ケイ, J. 野口裕二・野村直樹訳 1997 *ナラティブ・モデルを越えて* マクナミー, S.・ガーゲン, K.J. (編) *ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践* 金剛出版 (McNamee, S. & Gergen, K.J. (Eds) 1992 *Therapy as Social Construction*. Sage Publication.)
- 井上俊 1996 *物語としての人生* 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉 (編) *ライフコースの社会学* 岩波書店, 11-27.
- 小島秀夫 1995 *生涯発達心理学の成立と現状* 無籐隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見

- 孝・南博文・やまだようこ（編）生涯発達心理学とは何か ―理論と方法 金子書房, 11-36.
- 野家啓一 1992 科学の解釈学 新曜社
- 能智正博 2000 頭部外傷者の〈物語〉／頭部外傷者という〈物語〉やまだようこ（編）人生を物語る ―生成のライフストーリー― ミネルヴァ書房, 185-214.
- 大江健三郎 1998 恢復する家族 講談社文庫
- 大久保孝治 1989 生活史における転機の研究 ―「私の転機」(朝日新聞連載)を素材として― 社会学年誌, Vol. 30, 155-171。
- 乙武洋匡 1998 五体不満足 講談社
- プラス, D.W. 井上俊・杉野目康子訳 1986 日本人の生き方 現代における成熟のドラマ 岩波書店 (Plath, D.W. 1980 Long engagements. - Maturity in modern Japan. Stanford University Press.)
- サービン, T. J. 長田久雄訳 1991 心理学の根元的メタファーとしての語り 田中一彦編 現代のエスプリ 286 メタファーの心理 至文堂 所収 (Sarbin, T.R. 1986 The narrative as root metaphor for psychology. Sarbin, T.R. (ed.) Narrative psychology: The storied nature of human conduct. New York: Praeger.)
- 杉浦健 1996 スポーツ選手としての心理的成熟理論構築の試み 京都大学教育学部紀要, Vol. 42, 188-198.
- 田中一彦 1996 主体と関係性の文化心理学序説 学文社
- ホワイト, M.・エプストン, D. 小森康永訳 1992 物語としての家族 金剛出版 (White, M. & Epston, D. 1990 Narrative means to therapeutic ends. W.W.Norton & Company.)
- やまだようこ 1995 生涯発達をとらえるモデル 無籐隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見孝・南博文・やまだようこ（編）生涯発達心理学とは何か ―理論と方法 金子書房, 57-92.
- 矢野智司 1996 ソクラテスのダブルバインド ―意味生成の教育人間学 世織書房
- 矢野智司 2000 生成する自己はどのように物語るのか ―自伝の教育人間学序説 やまだようこ（編）人生を物語る ―生成のライフストーリー― ミネルヴァ書房, 251-278.
- 矢野喜夫 1995 発達概念の再検討 無籐隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見孝・南博文・やまだようこ（編）生涯発達心理学とは何か ―理論と方法 金子書房, 37-56.